

令和五年度 一般入学試験（B日程）国語

徳山看護専門学校

受験番号	
氏名	
得点	

※ 解答はすべて解答用紙に記入してください。

問題一 次の文章は、森鷗外の短編歴史小説「山椒大夫」のあらすじです。「安寿と厨子王」の物語といった方が分かりやすいかもしれませんね。このあらすじを読んで、問いに答えてください。

十二年前に上司の罪に連座して筑紫国に左遷された陸奥掾平正氏の消息が絶えた。陸奥掾とは陸奥国の役人で、貴族である。残された家族は、意を決し正氏を訪ねる旅に出る。平安時代、陸奥（東北）から筑紫（九州）までの旅はあまりに遠い。危険にも満ちていた。それでもなくても世間知らずで非力な女子供連れである。案の定、四人は人買いの手にかかり、小舟に分乗させられ、母は佐渡島へ売られ、姉の安寿と弟の厨子王の二人は、丹後の国の有力者、山椒大夫の邸へ売られていく。邸は、現在の京都府北部、名高い天橋立の近く日本海岸に在った。秋のことである。

買われた奴隷は、逃亡を企てれば額に焼き印を押される。仲のよい二人は厳しい監視の中、守本尊のお地藏様の加護も得て、心を合わせて必死に働き、冬を生き抜いていく。

だが、安寿は徐々に何かを秘めていく。

冬を耐え春が来て、安寿は十五歳、厨子王は十三歳になった。ある日、安寿は弟の厨子王に、単身脱出を唐突に、しかし、強い意志を込めて促す。山の上からそれを見届けて、安寿は沼に身を投げる。

逃げた厨子王は、近くの国分寺の曇猛律師にかくまわれ、都に登り、やがて亡き父の身分を継いで平正道を名乗る。出世して丹後の国守になった。丹後の国の長官である。

正道は、すぐさま人の売り買いを禁じ、山椒大夫の邸の奴隷を解放し、姉が身を投げた沼のほとりに尼寺を建てる。だが、佐渡にいるはずの母の消息は、地位を利用してくまなく探すが、ようとして知れない。人頼みを神仏が叱っておられるのだ。正道は、母を探して佐渡に渡る。そこには、身をやつし、盲目になり、農家の庭先で、安寿と厨子王を偲びながらさびしく鳥を追う母がいた。

問1 次の①～⑥は「山椒大夫」の原文から抜粋したものです。順序を変えています。あらすじに従って順序正しく並べ替え、番号で答えてください。

① 二人の船頭はそれきり黙って船を出した。佐渡の二郎は北へ漕ぐ。宮崎の三郎は南へ漕ぐ。「あれあれ」と呼び交わす親子主従は、ただ遠ざかり行くばかりである。母親は物狂おしげに舷に手をかけて伸び上がった。「もう為方がない。これが別れだよ。安寿は守本尊の地藏様を大切におし。厨子王はお父様の下すった護刀を大切におし。どうぞ二人が離れないように。」

② あくる日に国分寺から諸方へ人が出た。石浦に往つたものは、安寿の入水の事を聞いて来た。南の方へ行つたものは、三郎の率いた討手が田辺まで往って引き返した事を聞いて来た。
中二日おいて、曇猛律師が田辺の方を向いて寺を出た。跡からは頭を剃りこくって三衣を着た厨子王が附いて行く。二人は真昼に街道を歩いて夜は処々の寺に泊った。山城の朱雀野に来て、律師は権現堂に休んで、厨子王に別れた。「守本尊を大切にして往け、父母の消息はきつと知れる」と言い聞かせて、律師は蹠を旋らした。亡くなった姉と同じ事を言う坊様だと、厨子王は思った。

③ 姉は潮を汲み、弟は柴を刈って一日一日を暮らして行つた。姉は浜で弟を思い、弟は山で姉を思う。日の暮れを待つて小屋に帰れば、二人は手を取り合つて、筑紫にいる父が恋しい、佐渡にいる母が恋しいと、言つては泣き、泣いては言う。

④ そのうち女のつぶやいている詞が、次第に耳に慣れて聞き分けられて来た。それと同時に正道は瘡病のように身内が震つて、目には涙が湧いて来た。女はこういう詞を繰り返しつぶやいていたのである。
安寿恋しや、ほうやれほ。厨子王恋しや、ほうやれほ。
鳥も生あるものなれば、疾う疾う逃げよ、逐わずとも。

⑤ 珍しい旅人の一群ひとぐられが歩いている。母は三十歳を踰こえたばかりの女で、二人の子供を連れている。姉は十四、弟は十二である。それに四十位の女中が一人附いて、くたびれた二人を「もうじきにお宿にお着きなさいませ」といって励まし歩かせようとする。二人の中で、姉嬢は足を引きずるようにして歩いているが、それでも気が勝かつていて、疲れたのを母や弟に知らせまいとして、折々思い出したように弾力のある歩き方をしてみせる。

⑥ 厨子王は黙もくって聞いていたが、涙が頬を伝つって流れて来た。「そして、姉さん、あなたはどうしようというのです。」「わたしの事は構かまわないで、お前一人ですることを、私と一しょにするつもりでしておくれ。お父様にお目に掛かかり、お母様をも島からお連れ申した上で、わたしをたすけに来ておくれ。」

※「鷗外選集第五卷（岩波書店）」による。

問2 あらすじ文中 だが、安寿は徐々に何かを秘めていく。 とありますが、何を秘めていたのでしょうか。原文から書き出してください。

問3 原文④の中であなたの心に響いた文を書き出してください。ここでいう文とは「文章・段落・文・文節・単語」という文法上の言葉の単位で言う厳密な「文」ではなく、あなたが思う言葉の範囲だと思ってください。

問4 森鷗外の歴史小説は、過酷な運命に翻弄ほんろうされる人の激情を、むしろ簡潔な文体で淡々と物語る。それが、かえって読者に凄すみを与えると言われます。あなたがそのように感じる原文は①～⑥のどれでしょう。一つだけ選んでください。

問5 あらすじの中で傍線を引いた漢字の読みを書いてください。

問6 次の小説の中に森鷗外の作品が一つあります。番号で答えてください。

- ① 雪国 ② 注文の多い料理店 ③ 坊っちゃん ④ たけくらべ ⑤ 高瀬舟

問7 森鷗外について、あなたが知っていることを簡単に書いてください。

問題二 次の文章を読んで問いに答えてください。

初めての小さな旅

角田光代 かくたみつよ

① 厳しい暑さが続いたこの夏、地方での仕事が多く、東京でも地方でも、新幹線乗り場に毎週末のように行っていた。ホームには家族連れの姿が目立つ。みんな電車に乗り込む家族連れがほとんどだが、中には、両親らしき人、祖父母らしき人に見送られ、ひとり列車に乗る子供の姿もあった。きつと目的地のホームで、シンセキが待っているのだろう。それまでの一人旅。

② 一時間か、二時間か、列車の中にいるだけだが、子供にとっては大ボウケンにヒツテキする旅だろう。ハタから見れば座席にちよこんと座っているだけでもその子供の心の中は、心もとないのと、わくわくすると、自分は今すごいことをやっているという自信と、やり遂げられるかという不安と、あれこれ渦巻いてたいへんなことになっているだろう。

③ 走り出した列車の窓から、いつまでも手を振り列車を見送る大人たちを見て、いや、心の中が大変なことになっているのは子供より大人かもしれないと思いつく。コウシャエキでは必ず誰かが待っている、乗り換えするわけでも、ひとり知らない町を歩くわけでもないと思っても、無事着いたと連絡をもらうまでは気が気ではないだろう。何も手につかないのではないか。そうしてきつと、不安ばかりじゃないのだろう。ああ、ひとりで行ってしまった。泣かずにひとりで列車に乗り込んだ、窓から笑って手を振っていた。ひとりで行ってしまったほどに、大きくなってしまったんだなあ。成長にほっとしながらも、イチマツのさみしさを覚えるのではないか。今、列車が向かう駅よりもとずっとはるか先、ゆっくり大人になっていく子供がひとりで向かう、果てしない遠くをちらりと思つて。

※「国語一（学校図書株式会社）」による。

問1 この文章は本来「起承転結」の四段落で構成されていますが、問題文では③の部分に第三、第四段落を続けて書いています。この部分を本来の第三段落と第四段落に分けて、第四段落の最初の一文節を書いてください。

問2 解答欄の①には、例として問題文の第一段落の内容が要約され書かれています。これにならって、第二段落、第三段落、第四段落それぞれ書いてください。

問3 文中、傍線部の片仮名部分は本来漢字で書かれています。その漢字を書いてください。

問題三 雨の中で戦うラガー（ラグビー選手）を詠んだ短歌です。作者は、ずぶ濡れで競技場を疾走するラガーのどこに感動し、何を思っているのでしょうか。大きく想像を膨らませ、しかし、一語一句を丁寧に読み取って書いてください。

ずぶ濡れのラガーはし奔るを見おろせり 未来にむけるものみな走はしる 塚本邦雄